

初期近代イングランドのギャンブルといかさまについて —『テンペスト』のチェスの場면을起点として—

丹 羽 佐 紀*

(2018年10月23日 受理)

Gambling and Cheating at Games in Early Modern England: A Description of Chess in *The Tempest* and the Cultural Background for Other Games

NIWA Saki

Abstract

This paper aims to clarify how gambling and cheating penetrated early modern society in England and how they contributed to the prosperity of a wide variety of entertainments which Shakespeare and other playwrights in the 16th and 17th centuries illuminated in their plays. I especially compare chess, which Ferdinand and Miranda play in the final scene of *The Tempest*, with other games such as dice and cards which Elizabethan and Jacobean people played at taverns for gambling, usually while drinking. By analysing common aspects and differences between chess and other games, I clarify how the audience at that time interpreted the words related to gambling or cheating in each play and thereby reveal a better understanding of the cultural background of that period.

キーワード：初期近代イングランド、ギャンブル、いかさま、娯楽、劇

はじめに

シェイクスピアの『テンペスト』(*The Tempest*, 1611) 5幕1場においてファーディナンドとミランダがチェスを楽しむ場面は、従来、チェスが持つ恋愛のアレゴリーという観点から解釈されることが多かった。あるいは Adams が ‘chess was (and is) a game of war that necessarily results in a king’s figurative death’ と述べるように、チェスが持つ戦いのアレゴリーという観点からこの場面を解釈し、結婚の契りを交わしたファーディナンドとミランダが対局する行為を、当時の一大イベントであったエリザベス王女とパラティン選定侯の結婚と重ね合わせ、二

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

人が背負うプロテスタント王国の未来に不穏な政治情勢を読みとる批評家もいる。(20) トマス・ミドルトン (Thomas Middleton, 1570?-1627) の *A Game at Chess* (first staged in 1624) に至っては、スペインに対するジェームズ1世の外交政策が痛烈に批判されているだけでなく、個々の実在する人物たちの権謀術数が直接チェスの駒に反映されている。これらの解釈に共通しているのは、恋愛と戦いのいずれの観点にせよ、中世以前の古(いにしえ)からチェスが表象してきたテーマに沿い、二人の恋人たちの場面はその伝統的な捉え方に忠実に則って描かれていると見做していることである。

本稿では、『テンペスト』の5幕1場で繰り広げられるファーディナンドとミランダのチェスの別の点に注目したい。それは Poole が指摘するように、一つはミランダがチェスにいかさまの話をわざわざ持ち出していること、もう一つは、彼女が「王国を二十も奪いとるためなら、それもりっぱな手と言ってあげる」(‘Yes, for a score of kingdoms you should wrangle, / And I would call it fair play.’ (*The Tempest*, 5.1.174-75)) と話し、チェスを単なる娯楽としてではなく、金目のもの、つまりここでは資産価値の高い領地を賭けた勝負事とする前提で話をしているということである。Poole はここで、純粹初心^{うぶ}であるはずのミランダがそもそも「いかさま、ずる」という手口を知っていること、そしてギャンブルへの認識があることの奇妙さを指摘する。(52-53) 本稿ではこれを起点として、シェイクスピア時代の娯楽、特にギャンブルといかさまをめぐる背景について分析し、当時の観客が『テンペスト』のこの場面をどのように受けとめたのか、彼らの現実社会ではギャンブルやいかさまがどのように行なわれていたのかについて考察する。

1. 初期近代イングランドのギャンブル

(1) Gaming と Gambling

シェイクスピアの時代、いわゆるレジャーという発想がまだなかった時代に、市井の人々がどのようなスポーツやゲームを楽しんでいたのかについて、1884年に出版された *Folklore of Shakespeare* の中で Thiselton-Dyer が具体的な項目を挙げ、それぞれの遊びについてシェイクスピアの劇作品で触れられている箇所を紹介している。以下の表に各項目を示す。

| | |
|------------------------|--------------------|
| Archery | Leap-frog |
| All hid, all hid | Laugh-and-lie-down |
| *Backgammon | Loggat |
| Barley-break | Muss |
| Base | Nine-Men's-Morris |
| *Bat-fowling(cheating) | Noddy |
| Billiards | Novem Quinque |
| *Bone-ace | Parish-top |

| | |
|------------------------|-----------------------------|
| Bo-peep | *Primero |
| Bowls | Push-pin |
| *Cards | Quintain |
| Cherry-pit | Quotis |
| *Chess | Running for the ring |
| *Dice | Running the figure of eight |
| Dun is in the mire | See-Saw |
| *Fast and loose | *Shove-Groat |
| Fencing | Snowballs |
| Filliping the Toad | Span-counter |
| Flap-dragon | Stool-ball |
| Football | Tennis |
| Gleek | Tick-tack |
| Handy-dandy | *Tray-trip |
| Hide-fox and all after | Troll-my-dame |
| Hoodman-blind | *Trump |
| *Horse-racing | Wrestling |

Thomas Firminger Thiselton-Dyer, *Folklore of Shakespeare* (1884). Rpt. Hanserbooks, pp. 394-423.

* ギャンブルにつながる娯楽

上記の表には、子供が遊び興じるたわいのない遊びもあれば、ギャンブルに通じるものもある。さらに Ashton による定義に従えば、‘Gaming’は人々が「楽しむ」ことを目的として、「一時的に戯れ興じる」娯楽一般を指すのに対し、‘Gambling’はその中でも特に「金銭が絡む」こと、そして勝つためのスキルよりは「運に依る」ところが大きく、「この運の威力が大きければ大きいほど金銭への期待や執着も大きく」なり、時に「その勝敗は人生そのものを左右する」影響力を持つということになる。(1-2) ちなみに『テンペスト』をこの定義にあてはめると、ミランダが王国奪取の話を持ち出すのは明らかに金銭絡みでありギャンブルの発想と言えるが、チェスにおいては、少なくとも正常な対戦をする場合運だけでは無理があり、どうしてもスキルが求められるはずであり、その意味では他のギャンブルと一線を画すと推察できる。

(2) Dice, Cards といかさま

初期近代イングランドにおける代表的なギャンブルとして、dice, cards, lottery, backgammon を用いたものが挙げられる。これらはいずれも初期近代よりはるか昔から存在していたのであ

るが、シェイクスピアの時代にも広く人々の間に行き渡り、王侯貴族から庶民に至るまで、ギャンブルの常套手段となっていた。Beier によれば、ヘンリー 8 世時代に議会制定法で賭博が制限されていたにもかかわらず、実際は王自ら「賭博に凝り、エリザベス 1 世も同様であった。」(134) 特に dice は扱いやすいこともあり、戦の陣営や酒場を中心に様々な場所で興じられ、たいていは酒の勢いもあって喧嘩沙汰になるのが決まりのパターンであった。Ashton は、14 世紀から 16 世紀にかけてイングランドで実際に起こった、dice を巡る賭けが原因の裁判沙汰や殺傷事件の事例を 4 つほど挙げているが、そのほとんどは、相手がいかさまをした・しなかったと訴える揉め事が発端となっている。彼は 1551 年に起こった Arden of Feversham の殺人事件もテーブル・ゲームと dice と絡めて紹介している。(15-16) Thiselton-Dyer が dice に言及したシェイクスピアの作品箇所として挙げているのは、以下の 3 箇所である。

Henry: The confident and over-lusty French

Do the low-rated English play at dice. (*Henry V*, 4. Chorus. 19-20) ¹

(自信たっぷりで精力にあふれたフランス軍は、過小評価されたイギリス軍を賭けて賽を振っている。) ² [勝つのが明白である側が、どう見ても勝ち目のない不利な状況の相手を弄ぶ。] ³

Edgar: Wine loved

I deeply, dice dearly. (*King Lear*, 3.4.89-90)

(酒は溺れるほど好き、博打はふとところがうづくほど好き。)

Pistol: Let vultures gripe thy guts! —for gourd and fullam holds,

And high and low beguiles the rich and poor. (*Merry Wives of Windsor*, 1.3.92-93)

(手前 (てめえ) の腐った腸なんか烏にでも食われちめえ。ふところのいかさまさいころ一つ振りゃ、丁と半とで、有る奴、無い奴、みんなこっちにまきあげられらあ。) ⁴

(下線部 筆者)

いずれにせよ、このように dice に関する台詞はシェイクスピア劇の様々な場面で見受けられることから、当時の観客が各場面の状況を想像し、台詞の意味を理解するのは容易であったと考えられる。

上記引用のうち、ピストルの台詞にある ‘gourd’ と ‘fullam’ はいずれもいかさまサイコロのことである。Ashton は、初期近代イングランドにおける dice のいかさまについて、Charles Cotton の *Compleat Gamester* という本に示された Palming, Topping, Slurring, Knapping, Stabbing という 5 つの

主な方法を紹介している。(19-21) これらのいかさまは、cards でも同様に用いられる。前出の Thiselton-Dyer が cards に言及したシェイクスピア劇で引用しているのは、以下の4作品である。

Edmund: And hardly shall I carry out my side,

Her husband being alive. (*King Lear*, 5.1.61-62)

([後家をとれば姉のゴネリルがぶんむくれに怒り狂う、と言って亭主もちをとれば]こちらの狙いはとても的には届かない。)[賭けで味方と共に有利な立場に立つ。]

Cominus: he lurch'd all swords of the garland.' (*Coriolanus*, 2.2.106)

(彼は常に勝利の栄光を独占してきた。)[断然有利な状況で他の兵士から(金を)巻き上げる。]

Gloucester: The King was sliily finger'd from the deck. (3 *King Henry VI*, 5.1.44)

((トランプの十のカードを盗もうとしているあいだに、)キングのカードを[カードの束から]抜きとられたことに気づかないとは!)

Cleopatra: nature wants stuff

To vie strange forms with fancy. (*Antony and Cleopatra*, 5.2.97-98)

(不可思議なものを生む力は自然も空想にはおよばない。)[自然は空想と賭けるための物が足りない、賭けられる物がない。]

(下線部筆者)

Beier が引用している Gilbert Walker の *A Manifest Detection of Diceplay* (1552) と呼ばれる rogue pamphlet では、サイコロの様々ないかさまの手口が暴露されている。

Yet are there many ways to deceive. Primero, now, as it hath most use in court, so is there most deceit in it. Some play upon the prick, some pinch the cards privily with their nails, some turn up the corners, some mark them with fine spots of ink. . . . Other helps I have heard of besides, as to set the cozen upon the bench with a great looking-glass behind him on the wall, wherein the cheater might always see what cards were in his hand. Sometimes they work by signs made by some of the lookers-on. . . . A woman should sit sewing beside him, and by the shift or slow drawing her needle give a token to the cheater what was the cozen's game. (79)

Dice や cards のようなツールは Bloom も指摘するように、チェスとは大きく異なる点があ

る。例えば cards は、戦略の要となるカードの中味がカードを握る当人にしか見えず、対戦相手や、第三者である観戦者には見えない。したがって他の人には見えず自分だけが見える部分でいかに勝ちゲームへの戦略を練るかが重要となる。と同時に、この見えない部分でいかさまを企むことが比較的容易であることから、いかさまを生業とする者も多かったと言える。これに対しチェスは、対戦する当事者どうしだけでなく誰の目にもリアルタイムで戦局状況が明らかにされる。且つ、チェスの場合、「一つ駒が動くたびに過去の戦局は再度シャッフルされ、対戦者は、駒が動いた時点からの新たな戦略の立て直しを迫られ、観戦者にとっては予測の立て直しが求められる。」(Bloom, 422) したがって、チェスは運任せの dice や見えない部分を持つ cards に比べ観衆の目に晒されやすく、より対戦者自身のスキルが求められるゲームであり、その分いかさまをするのも難しくなる。

(3) Lottery の正当性

Lottery は、Thiselton-Dyer においては、人々が直接の行為において関わる娯楽という項目には数えられていないが、運に懸けるという点から Ashton や Brenner においてはギャンブルと位置づけられている。Brenner も述べているが、もともと lottery の歴史は古く、旧約聖書にも王の選出 (Samuel 1, 10.20-1) から生贄の選出 (Levi, 16.8-10) などに至るまで用いられたことが言及されており、その正当性が後の時代における政治でも許容される根拠となっている。Brenner によれば、初期近代イングランドにおいて「エリザベス1世もジェームズ1世も積極的に lottery を導入し、その収益金は Virginia Company の資金を賄う資金源となった。」(10)

3. チェスの位置づけ

以上見てきたように、初期近代イングランドの観客にとって、dice や cards は一般的な気晴らしからギャンブルに至るまで人々の日常生活に位置づけられる娯楽であったが、チェスはどのような娯楽と見られていたのだろうか。当時、チェスがギャンブルと実際に結びつくケースはあったのか、そしてルールはどの程度まで理解されていたのだろうか。

Eales によれば、チェスはヨーロッパにおいては12世紀以降、徐々に一般の知識階級層に浸透していったとされる。初期には修道士を中心とする聖職者たちが学ぶ数学、幾何学及び宗教学などに付随するものとして位置づけられ、後には富裕層の子弟教育における知的な娯楽としてだけでなく、政治や道徳にまつわる象徴的意味を持って捉えられることが多くなった。(51-53) 16世紀に入り、ルールの改定などで煩雑さが解消されチェスがより身近になったとしても、Eales が述べるように、庶民にとって非日常的な、あるいは滅多に触れることのない娯楽であったとすれば、劇の上演においてもそれは同様に、現実のゲームとしてよりはむしろアレゴリーとしての方が受けとめやすかったと言える。

しかし一方で Bloom は、ルールの簡素化によりチェスもギャンブルに使われやすくなったこと、印刷技術の向上により指南書が出回りやすくなったことなどを理由に、初期近代において

少なくとも都会を中心に、一般の人々の間で基本的なルール等の知識は浸透していたと捉える。

Although chess had traditionally been a game for the elite, it was increasingly available to a range of players in the early modern period, in part because new rules that made for faster play turned it into a wagering game and in part because the printing press supported the publication of texts that taught chess rules and strategies. An English example of the latter is G. B., *Ludus Scacchiae: chesse-play.* (420n)

ちなみに Ashton によれば、ギャンブルとしてのチェスに言及した記録はないと断った上で、チェス発祥の地とされる国の人々は現代においても概してギャンブル好きであるとその地域的傾向を分析している。(4)

初期近代イングランドにおいて、チェスにはどのようないかさまがあり得たかについて、Bloom は 19 世紀文芸批評家の Walter Benjamin が実例として取り上げた、チェスをする機械人形のからくりを取り上げている。(424-25) チェスは他のゲームに比べていかさまをするのが困難であることを前提とした上で、「他人との共謀によるなりすまし、駒のすり換え、駒の動かし方の反則」などを挙げる。後者二つの手口は注意深く対局を見ている観戦者には容易に見破られ、このような反則を防ぐために例えば touch-move rule のような規則があるので、実際にチェスをする場面でこのようないかさまが通用した例への言及はほとんど見当たらない。Bloom はさらに、なりすましの仕組みを既存の政治体制の欠陥を浮き彫りにする 'griever' のような役割だと位置づけ、『テンペスト』におけるミランダにも同様の役割を読みとろうとする。Walter Benjamin 流の 'destructive character' は、Chakravorty がトマス・ミドルトンを評する際にも引き合いに出される。(194)

4. 『テンペスト』におけるチェスのいかさま

『テンペスト』のチェスの場面では、劇のあらすじの成り行き上、演出として舞台上に本物のチェス盤が置かれることが必要となる。舞台上にチェスのボードが見えたとすれば、その置き方が問題となる。本来のチェスの対局のように、チェス盤での対戦状況を観客が同時並行で観ることが可能であれば、ファーディナンドがどのようないかさまをしたことに対してミランダがずるいと指摘したのか、観客は情報を共有できる。そのためには、チェス盤の上に駒がどのような配置で置かれていたのか、観客に把握できる演出が必要である。この状況でいかさまをする場合、Bloom が説明するところの人物のすり替えという手口は考えられないため、おそらく駒の動かし方の反則が最も認識しやすいと考えられる。この方法は、チェスの知識がある人なら誰でも気がつくため、いかさまとして高度なテクニックとは言えない。駒をすり替える場合、演じる俳優には上手にすり替えてみせる手品のような演技が必要とされる。一方、チェス盤が観客にはっきり見えない演出の場合、すなわち舞台奥に置かれたり、幕がかかって全

体像が曖昧にされる時は、ルールに反して駒を動かしたり、駒をすり替える反則も想定し得る。そもそも手口自体が明らかにされる必要はないかもしれないが、観客には見えるべき戦局が「見えない」という、すっきりしない後味が残る。

5. 終わりに — 初期近代イングランドにおけるいかさま師と社会的背景 —

これまで述べたように、dice, cards などを用いたギャンブルは、シェイクスピアの時代に国王を筆頭として王侯貴族から酒場へ足を運ぶ庶民に至るまで、様々な階層の間で広く行なわれていた。且つそこに多額の金銭が動くとなれば、当然ながらそれを狙ういかさま師も至る所にいたと考えてよい。これらの人々の存在は、Beier, Kinney や Jütte も述べるように、ヘンリー8世時代の修道院解散やインフレなどを発端とする、当時の社会における貧困問題や都市部の人口密集とも密接に関連していたと考えられるが、Jütte は、いわゆる ‘underworld’ と呼ばれる社会の犯罪や検挙率、罪状などについて当時の断片的な記録を根拠に正確な統計値を求めるのは困難に等しいことを指摘している。(149) それは第一に、当然ながら多くの者は自ら罪状について名乗り出ることにはしないであろうし、Beier によれば、「いかさまを生業とするプロもいれば、ギャンブルの場を離れればごく普通の人物に戻る、その場限りの場合も多かった。」(135) その場合、検挙や罪状の比重の定義は曖昧にならざるを得ない。逮捕された後、放免された可能性もある。さらに Kinney や Beier の分析によれば、人が多く集まるロンドンだけでなく地方でも犯罪の事例が多くあり、そうであればギャンブルに携わるいかさま師たちの行動範囲も例外ではない。しかし、なるほど彼らは ‘underworld’ の界隈を歩き歩いた犯罪者と位置づけられるかもしれないが、シェイクスピア劇の様々な場面での生き生きとした描写に見られるように、別の見方をすれば、彼らのような層の人々が活躍する場が常にあったということ自体、当時の人々の生活に根付いていたギャンブル文化の一側面を彼らが担っていたことの証左となっているとも言える。いかさまが発覚した場合、それは犯罪と見做され処罰の対象となった。1571年にロンドンのシティ当局は布告を出していかさま師への取り締まりを強化したが、実際のところ何を基準として犯罪の度合いを計るのか、明確な判断をするのは非常に困難であったに違いない。それは同時に、彼らの存在を単なるアウトローとしてではなく、歴史における一現象として捉え、文化的背景の中に位置づけることの必要性を後世に促すものである。

* 本稿は、第57回シェイクスピア学会 セミナー2：シェイクスピア劇と同時代の娯楽・風俗文化（2018年10月14日 於 津田塾大学）において、「初期近代イングランドのギャンブルといかさまについて — 『テンペスト』のチェスの場面を起点として —」と題して発表した原稿に加筆修正を施したものである。発表に際しては、学習院大学教授中野春夫氏、千葉大学教授篠崎実氏、文教大学准教授土井雅之氏、熊本大学准教授松岡浩史氏に多くの貴重なご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

註)

- 1 シェイクスピアの劇作品におけるテキストの引用は、全て W. J. Craig ed, *The Complete Works of William Shakespeare* (Oxford: OUP, 1905, Rpt. 1955) による。
- 2 日本語訳は、小田島雄志訳による。
- 3 dice における用語の意味については、[] で示した。
- 4 日本語訳は、三神勲・西川正身訳（小津次郎解説）による。

主要テキスト

Craig, W. J. ed. *The Complete Works of William Shakespeare*. Oxford: OUP, 1905. Rpt. 1955.

Shakespeare, William. *The Tempest*. Eds. Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan. London: Bloomsbury, 1999.

Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. David Lindley. Cambridge: CUP, 2002.

主要参考文献

- Adams, Jenny. *Power Play: The Literature and Politics of Chess in the Late Middle Ages*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006.
- Armitage, David, Conal Condren, and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought*. Cambridge: CUP, 2009.
- Ashton, John. *The History of Gambling in England*. London: Duckworth & Co. 1898. Rpt. Tokyo: Athena Press, 2006.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen & Co. Ltd, 1985.
- Bloom, Gina. 'Time to Cheat: Chess and *The Tempest's* Performative History of Dynastic Marriage'. Valerie Traub ed. *The Oxford Handbook of Shakespeare and Embodiment*. Oxford: OUP, 2016. 419-34.
- Brenner, Reuven, and Gabrielle A. Brenner. *Gambling and Speculation: A Theory, a History, and a Future of Some Human Decisions*. Cambridge: CUP, 1990.
- Carroll, William C. *Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1996.
- Chakravorty, Swapan. *Society and Politics in the Plays of Thomas Middleton*. Oxford: Clarendon Press, 1996.
- Chalfant, Fran C. *Ben Jonson's London: A Jacobean Placename Dictionary*. Athens: The University of Georgia Press, 1978.
- Clegg, Cyndia Susan. *Press Censorship in Jacobean England*. Cambridge: CUP, 2001.
- Coast, David. *News and Rumour in Jacobean England: Information, Court Politics and Diplomacy, 1618-25*. Manchester: Manchester University Press, 2014.
- Cruden, Alexander. *Cruden's Complete Concordance: To the Old and New Testaments*. 1737. Rpt. Peabody: Hendrickson, n.d.
- Eales, Richard. *Chess: The History of a Game*. London: B. T. Batsford Ltd., 1985.
- Gossett, Suzanne. *Thomas Middleton in Context*. Cambridge: CUP, 2011.
- Jackson, Ken. *Separate Theaters: Bethlem ("Bedlam") Hospital and the Shakespearean Stage*. Newark: University of Delaware Press, 2005.
- Jütte, Robert. *Poverty and Deviance in Early Modern Europe*. Cambridge: CUP, 1994.
- Kinney, Arthur F. *Elizabethan and Jacobean England: Sources and Documents of the English Renaissance*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011.
-, ed. *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990.
- Limon, Jerzy. *Dangerous Matter: English Drama and Politics 1623/24*. Cambridge: CUP, 1986.
- McCullough, Peter E. *Sermons at Court: Politics and Religion in Elizabethan and Jacobean Preaching*. Cambridge: CUP, 1998.
- Murphy, Patrick M, ed. *The Tempest: Critical Essays*. New York: Routledge, 2001.
- Murray, H. J. R. *A History of Chess*. Oxford: Clarendon Press, 1913.
- Newman, Karen. *Cultural Capitals: Early Modern London and Paris*. Princeton: Princeton University Press, 2007.
- O'Callaghan, Michelle. *Thomas Middleton: Renaissance Dramatist*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2009.
- O'Sullivan, Daniel E. *Chess in the Middle Ages and Early Modern Age: A Fundamental Thought Paradigm of the Premodern World*. Göttingen: De Gruyter, 2012.
- Patterson, Serina, ed. *Games and Gaming in Medieval Literature*. New York: Palgrave Macmillan, 2015.
- Perry, Curtis. *The Making of Jacobean Culture*. Cambridge: CUP, 1997.
- Poole, William. 'False Play: Shakespeare and Chess.' *Shakespeare Quarterly*. Vol. 55, Number 1, 2004. 50-70.
- Rickard, Jane. *Writing the Monarch in Jacobean England: Jonson, Donne, Shakespeare and the Works of King James*. Cambridge: CUP, 2015.

- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1973.
- Thiselton-Dyer, Thomas Firminger. *Folklore of Shakespeare*. New York: Harper & Brothers, 1884. Rpt. Hanserbooks, n.d.
- Traub, Valerie, ed. *The Oxford Handbook of Shakespeare and Embodiment: Gender, Sexuality, and Race*. Oxford: OUP, 2016.
- Walker, Gilbert. *A Manifest Detection of the Most Vile and Detestable Use of Diceplay, and other Practices Like the Same*. 1552. *Rogues, Vagabonds and Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Ed. Arthur F. Kinney. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990. 65-84.
- Yalom, Marilyn. *Birth of the Chess Queen*. London: Pandora Press, 2004.
- A. L. バイアー著『浮浪者たちの世界 シェイクスピア時代の貧民問題』佐藤清隆訳（同文館、1997年）
- 小津次郎解説『シェイクスピア全集 第二巻 喜劇Ⅱ』（筑摩書房、1967年）
- シェイクスピア、ウイリアム『シェイクスピア全集 I』小田島雄志訳（白水社、1985年）
- シェイクスピア、ウイリアム『シェイクスピア全集 IV』小田島雄志訳（白水社、1986年）
- シェイクスピア、ウイリアム『シェイクスピア全集 V』小田島雄志訳（白水社、1986年）
- シェイクスピア、ウイリアム『リア王』小田島雄志訳（白水社、1983年）